

旅人、寄留者なのですから

ペテロの手紙第一 2章 11-12節

はじめに

私たちの教会では、毎月テーマを決めています。そして毎月、第一週の礼拝の説教では、その月のテーマに従ってお話しています。6月のテーマは、「社会生活」となっています。

今日は、「ペテロの手紙第一」から学びたいと思いますが、使徒ペテロは、今日の聖書箇所 2章 11節以下で、イエス様を信じるクリスチャンが、国民として、社会人として、家庭人としてどのように歩んだらよいのかということをお話しています。

1. 愛する者たち。旅人、寄留者なのですから

11節にはこうあります。「**愛する者たち、私は勧めます。あなたがたは旅人、寄留者なのですから、たましいに戦いを挑む肉の欲を避けなさい**」。ここには、イエス様を信じるクリスチャンとは、何者なのかが書かれています。

イエス様を信じるクリスチャンは、まず第一に、神様に愛されている者です。ペテロはここでクリスチャンたちを、「愛する者たち」と呼んでいます。直訳すれば「愛されている者たち」となります。イエス様を信じる私たちクリスチャンは、神様に愛されている者ですが、私たちはそもそもなぜ神様に愛されているのでしょうか？

イエス様がバプテスマを受けられた時、神様は天から「**あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ**」(マルコ 1:11)と言われました。またイエス様が高い山で御姿が変わった時も、神様は雲の中から「**これはわたしの愛する子、彼の言うことを聞け**」(マルコ 9:7)と言われました。神様はイエス様を愛し、イエス様のことを喜んでおられます。

私たちクリスチャンは、イエス様を信じ、イエス様と一つに結ばれました。そしてキリストの体の一部とされました。神様はイエス様を愛し、喜んでおられるので、イエス様と一つに結ばれ、イエス様の体の一部とされた私たちのことも愛し、喜んでくださっているのです。私たちクリスチャンは、イエス様にあって神様に愛され、喜ばれている者たちなのです。

イエス様を信じるクリスチャンは、第二に、旅人であり、寄留者です。使徒パウロは、「**私たちの国籍は天にあります**」(ピリピ 3:20)と言いました。私たちは、イエス様を信じてクリスチャンになった時、神様の子どもとして新しく生まれました。新しく生まれた子どもは、国籍を持たなければなりません。イエス様を信じて神様の子どもとされたクリスチャンは、神様とイエス様がおられる天に、国籍を持つ者とされるのです。

私たちは、天からこの地上に海外旅行に来ている旅人のような者であり、外国人と言えます。私たちの人生は旅であり、私たちは今、天の故郷を目指す旅の途中だと言えます。よく

クリスチャンが天に召された時、「天に旅立って行った」と言われますが、私たちは「天に旅立って行く」のではなく、「天から旅立って来た」のです。ですから私たちは、「天に帰る」のであり、「天に帰郷する」のです。私たちの故郷、ホームは天にあります。私たちは今、旅先、アウェイで暮らしているのです。ですからこの地上の人生が永遠に続くわけではありません。地上の人生は一時的であり、天の故郷でのいのちが永遠に続くのです。私たちは、地上の人生がすべてであるかのように思ってしまいます。しかし天に国籍を持つ私たちの人生は、天において永遠に続くのです。

私たちは、国籍を持つ国の法律にまず第一に従わなければなりません。もちろん旅をしている国の法律にも従わなければなりません、まず第一に従うべきなのは、国籍を持つ国の法律です。私たちクリスチャンは、天に国籍を持っています。それゆえ私たちはまず第一に、天の法律、つまり神様の律法にまず第一に従わなければなりません。もちろん旅をし、在住している国の法律にも従わなければなりません。しかしあくまでも、私たちがまず第一に従うべきなのは、神様の律法なのです。

私たちクリスチャンは、イエス様にあって神様に愛され、喜ばれています。そして神様の子どもとして新しく生まれ、天に国籍を持つ者とされています。私たちはあくまでも旅人であり、寄留者に過ぎません。私たちの地上の人生は、あくまでも一時的なものです。天にある永遠の住まいこそ、私たちの故郷であり、ホームなのです。それゆえ私たちは、地上の人生がすべてであるかのように生きるのではなく、天の故郷を目指した旅人として生きなければなりません。また天に国籍を持つ者として、天の法律、神の律法に従わなければなりません。

2. たましいに戦いを挑む肉の欲を避けなさい

今日の聖書箇所ではペテロは、神様に愛され、喜ばれ、天に国籍を持つ私たちクリスチャンに対して、二つのことを勧めています。

一つは、「たましいに戦いを挑む肉の欲を避けなさい」ということです。「肉の欲」とは、この世の欲望のことです。天に国籍を持つクリスチャンは、この世では旅人であり、寄留者です。ですからこの世の欲望に惑わされることなく、天に国籍を持つ者らしく歩みなさいということなのです。

では、「肉の欲」とは具体的にどのようなものなのでしょうか？パウロはガラテヤ5：16-17でこう言っています。「**御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らうからです**」。「肉の欲」とは、「御霊」に対立するものです。私たちには、「肉の欲」に従って歩むか、「御霊」に従って歩むかの二つの生き方があるのです。「肉の欲」に従って歩むとは、次のようなものです。「**すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです**」(ガラテヤ5：19-21)。逆に、「御霊」に従って歩むとは、次のようなものです。「**愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です**」

(ガラテヤ 5:22-23)。ペテロは、このような罪深い「肉の欲」を避けなさいと勧めています。

「肉の欲」を避けるということは同時に、「御霊」に導かれて歩むということなのです。私たちは、「御霊」に従って歩むか、「肉の欲」に従って歩むか、どちらに従って歩むかを選ばなければなりません。

ペテロは、「肉の欲」は私たちのたましいに戦いを挑むものだと教えています。「肉の欲」に従えば、私たちの魂にダメージを受けます。逆に「御霊」に従えば、私たちの魂に愛と喜びと平安が与えられます。宗教改革者のカルヴァンはこう言いました。「われわれは、肉体に害を与えるのではないかと恐れるような敵から身を守るには、たいへん思慮深く注意深いのに、たましいに関しては、われを殺す、たましいにとって共存しえない敵をよろこんでむかえ入れる。すなわち、われわれは、それらの敵に、切ってくださいといわんばかりにのどをさし出すのである」。私たちは、体が不調な時には必死になって治療しますが、たましいに関しては無頓着で、あまりにも無防備です。「肉の欲」は、私たちのたましいに大きなダメージを与えます。私たちは体の健康も大切ですが、まずたましいの健康のことを考えなければなりません。そのためには、「肉の欲」を避け、「御霊」に導かれて歩まなければならないのです。

天に国籍を持つ私たちクリスチャンは、もちろん体の健康を大切にしますが、何よりもたましいの健康を考えなければなりません。たましいの健康は、「肉の欲」を避け、「御霊」に導かれる時に与えられます。そして「御霊」こそが、私たちの天の故郷までの旅路を導いてくださるのです。

3. 異邦人の中にあつて立派にふるまいなさい

今日の聖書箇所ではペテロが、神様に愛され、喜ばれ、天に国籍を持つ私たちクリスチャンに対して、勧めているもう一つのことは、12節にあるように「**異邦人の中にあつて立派にふるまいなさい**」ということなのです。

「異邦人」とは、外国人のことですが、私たちクリスチャンは天に国籍を持つ旅人であり、寄留者です。その意味で「異邦人」とは、クリスチャンではない人、イエス様を信じていない人のことと言えます。私たちは、クリスチャンの中だけで、教会の中だけで立派にふるまうのではなく、クリスチャンではない人の中で、社会の中で立派にふるまわなければなりません。私たちが暮らす日本は、クリスチャンが全体の1%もいませんから、私たちが通う学校や職場のほとんどの人はクリスチャンではないことが多いと思います。また家庭の中でも、自分だけがクリスチャンということもあるかもしれません。私たちは、クリスチャンの中だけ、教会の中だけでなく、学校や職場、家庭の中でも立派にふるまうことが求められているのです。

「立派なふるまい」とは、どんなものなのでしょうか？この言葉は、「魅力あるふるまい」「美しいふるまい」という意味の言葉です。私たちには、クリスチャンではない人たちの中で、魅力ある、美しいふるまいをしなければなりません。ペテロは、今日の聖書箇所以降の2：

13以下で、私たちクリスチャンが、国民として、社会人として、家庭人としてどのように歩んだらよいのかということをお教えしていますが、それを一言で言えば、「従う」ということです。王や総督に従う、主人に従う、夫に従うということです。そうした自分の上に立つ権威に、誠実に従うことこそ、「魅力ある、美しいふるまい」の一つと言えます。

もう一つは3:9にあります、「**悪に対して悪を返さず、侮辱に対して侮辱で返さず、逆に祝福する**」ということです。ペテロは、このようなことを「魅力ある、美しいふるまい」と考えているように思います。

では、私たちがクリスチャンではない人たちの中で立派にふるまう時、どのようなことが起こるのでしょうか？12節にはこうあります。「**そうすれば、彼らがあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いを目にして、神の訪れの日に神をあがめるようになります**」。当時、クリスチャンたちは悪人呼ばわりされていたようです。4:4には、「**異邦人たちは、あなたがたと一緒に、度を越した同じ放蕩に走らないので不審に思い、中傷します**」とあります。クリスチャンたちは、「肉の欲」を避け、クリスチャンではない人と同じような放蕩を行わないので、気に食わずに、陰口や悪口を言われたようです。

現代の日本においては、宗教に熱心であることがあまり良いことと思われないことが多いように思います。そのことで、変わった人と思われて、陰口や悪口を言われることもあるかもしれません。しかし、そのような陰口や悪口を封じるのは、私たちの「立派なふるまい」なのです。

ここには、「あなたがたの立派な行いを目にして」とありますが、この「目にして」という言葉は、「じっくり観察する」という意味の言葉です。クリスチャンではない人たちは、私たちクリスチャンのふるまいをよく見て、じっくり観察しているのです。私たちは、見られているのです。だからこそ私たちは、しっかりと「立派なふるまい」をしなければなりません。

私たちの「立派なふるまい」には、希望があります。それは、私たちの「立派なふるまい」をよく見て、観察していた人たちが、「神の訪れの日に神をあがめるようになる」という約束があるからです。「神の訪れの日」とは、必ずしもイエス様がこの地上に来られる日とは限りません。神様は今も、救いのためにクリスチャンではない人たちのもとに訪れて、神様をあがめさせてくださるのです。

私たちは言葉による伝道も大切ですが、行いを通して伝道することができます。私たちの「魅力ある、美しい、立派なふるまい」が人々を救いに導くことができるのです。私たちの「魅力ある、美しい、立派なふるまい」をよく見て、観察している人たちのもとに、神様が訪れて、救いに導き、神様をあがめるようにしてくださるのです。私たちはその約束を信じて、クリスチャンではない人たちの中で、特に学校や職場や家庭の中で、「立派なふるまい」に努めなければなりません。

おわりに

私たちクリスチャンは、イエス様にあつて神様に愛されています。私たちはイエス様を信じた時に、神様の子どもとして新しく生まれ、天に国籍を持つ者とされました。私たちは、天からこの地上に旅をしている旅人であり、外国人です。私たちはやがて天の故郷に帰って行くのです。

ですから私たちは、この地上の生涯の中で、何よりもまず神の律法に従って歩まなければなりません。もちろん私たちは、社会のあらゆる法律に従う必要があります。しかし私たちがまず第一に従うべき法律は、天の法律である神様の律法です。

私たちは、天に国籍を持つ旅人であり、寄留者ですから、この「世の欲」に溺れてはなりません。この「世の欲」は私たちのたましいにダメージを与えます。私たちは、この「世の欲」に導かれて生きるのではなく、「御霊」に導かれていかなければなりません。「御霊」こそ、私たちが天の故郷まで導いてくださる方です。

それでも私たちは、地上の生涯の間、学校や職場や家庭などの社会の中で生きることが求められています。私たちは、天に国籍を持つ者だからといって、社会から離れて生きるのではなく、社会の中で「魅力ある、美しい、立派なふるまい」をしなければなりません。神様は、わたしたちのそのような良い行いを用いて、クリスチャンではない人たちのもつとに訪れ、救いに導き、神様をあがめるようにしてくださるのです。

天の故郷に帰るまでの私たちの旅路は、まだまだ続きます。私たちは、御霊に導かれ、よい行いを通して、社会の中で地の塩、世の光として、神様を証しして歩いていきましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたがイエス様にあつて私たちを愛してくださり、あなたの子どものもつとして受け入れ、天に国籍を持つ者としてくださったことを感謝します。この世の人生は一時的であり、天の故郷でのいのちは永遠に続きます。どうかこの世の旅路の中で、この「世の欲」に導かれるのではなく、「御霊」に導かれて歩むことができますように。また社会の中で、「立派なふるまい」を通して、あなたを証しし、人々を救いに導くことができますように。

私たちのこの世の旅路を最後までどうかお守りください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。